研　究　経　過　報　告

田　畑　　治

本学部に着任して，早くも2年を経過した。ここではこれまでに報告してきた研究課題の柱に沿って，この1年間の報告をしたい。

1. 主要な研究テーマ「心理治療関係による人格適応過程の研究」に関しては，以下の研究がまとめられた。

「来談者中心療法における夢の一考察」教育心理学科紀要　24巻　昭和52年11月

「4. 事例」田畑・村山編　講座心理療法1. 来談者中心療法　福村出版　昭和52年8月　Pp. 139－154.

上記のテーマに関しては，近年ケース研究が非常に重要視され，かつまた臨床の現場からも数多くなされるようになってきている。筆者自身も，この一年大学院臨床心理学研究において"ケース研究の諸問題"を検討してきた。基本的には，どのような態度条件でセラピストがクライエントに接し，どのような変容がクライエントに起るかという視点でもって検討するとき，まだまだ不十分なケース研究といわざるを得ないものもみられる。筆者は，今後，治療関係のあり方，質などについて吟味し，研究をより一層発展させたいと考えている。

なお，過去13年間にわたってすすめてきた「治療関係の体験目録」を用いての研究にピリオドを打つべく申請していた昭和52年度文部省科学研究費が幸いに助成され，今春下記のかたちで出版された。

「心理治療関係による人格適応過程の研究」　風間書房　昭和53年3月

2. 教育臨床に関する研究は，目下休業中である。

3. グループ・アプローチの実践研究。これは前年に引き続き，より自己発見につとめ，また数カ所でファシリテーターの体験をもった。まず学生相談に携わる人自らがグループ体験をもつということの意義に同調する教官有志によって，山形大保健センター末広晃二先生のお世話で，"蔵王山エンカウンター・グループ"がもたれた。これは，ファシリテーターを設けないグループとして，自由に動けたし，自らにも挑めた記憶に新らしいグループであった。またファシリテーターとして参加したいくつかのエンカウンター・グループで，特筆すべきこととして，名大学生相談室主催の"自己再発見のための合宿セミナー"がある。筆者自身も，新らしい自分にいく度か出会えた思いがしている。

「蓼科でのグループ ── 名大での初体験」名古屋大学学生相談室　『大学生の留年の実態とその要因の分析および指導法に関する研究』昭和53年3月　Pp. 42－45（非売品）

筆者が主宰しているカウンセリング研究会では，今年度はメンバー相互の異質の協同によって，「沈黙に関する研究」に取り組んだ。この会は，カウンセリングの体験深化を計ろうとするメンバーその人にとって，ひとりひとりの動きが重視されるのであるが，ただそこに寄って集って，慣れ合いになったり，相互依存べたべたになってしまっていた従来の会より，より一層高められるための努力が結集し，最終的には，「一クライエントにおける沈黙の研究」が取り上げられた。しかし，各自の取り組みの結果を，一つに統合し，しかるべき成果を世に問うところまでには，いまひとつ時間的余裕が乏しく，同一メンバーによるインテグレーションを見るに至らずじまいになっている。しかし集積された基礎データは今後，客観的研究に高められることも期待される。

4. 臨床青年心理学への接近。近年，精神病理学や精神医学の領域で，思春期や青年期の問題が特に注目を集めている。高学歴化し，かつ管理社会化したなかで，青年がぶつかる人生途上での「岐路」は，家庭内暴力，登校拒否，無気力，スチューデント・アパシー，自殺，シンナー，性非行，神経性拒食などによって露呈してきている。われわれは，臨床的経験をもった症例を相互に批判的に検討しはじめている。その手はじめに，若手研究者と共同して，「序説」を世に問うた。

「臨床青年心理学序説」　教育心理学科紀要　24巻　昭和52年11月（生越・池田・伊藤・間宮と共同）

次年度からは，より組織的にすすめるべく，症例を検討するなかで，われわれの視点を再吟味していきたいと考えている。

5. その他の活動等について

「来談者中心療法における"夢"の諸問題　東海心理学会第26回大会　昭和52年5月

「親子関係の病理」『青年心理』第1巻2号，96－103頁　昭和52年5月

「カウンセリングと人間の成長」　愛知県勤労会館ニュース『つるまい』第79号　昭和52年7月

『来談者中心療法』　講座心理療法第1巻　福村出版　昭和52年8月　（村山正治と共編）

「家庭における父親の役割」『教育愛知』－特集厳しさ・しつけ　巻頭論文　昭和53年1月

「藤土ケースへのコメント」　学生相談箱根シンポジウム　昭和53年1月

「自己概念 他」　佐治守夫・水島恵一編　『心理療法の基礎知識』　有斐閣　昭和52年10月

教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告——3年目——

村上　隆

また1年が過ぎた。最初の2年間に比べれば，比較的充実した年であったように思う。52年8月から53年7月までの経過について述べる。

(1) 3相データ解析

前年に引き続き，後藤宗理，辻本英夫両氏とともに検討を行なった。その一部は，行動計量学会第6回大会に発表，また本紀要にも共同で執筆した。これらは一応の里程標であり，将来への"たたき台"にすぎない。現在のところ3相データ解析と言っても，通常の因子分析への reduction と3相因子分析をとりあげているにとどまるが，今後は更に他のモデルにも手を広げていきたい。モデル構成の面から見れば，この領域は極めて豊かな可能性を持つように思われる。適用とモデル開発の両面から，本年も最も力を注いでいきたい領域である。

(2) 職業レディネステストの分析

やはり3相データの問題で，雇庸促進事業団職業研究所との共同研究である。データは，同研究所開発の"職業レディネステスト"を，広島県下の中学生，高校生にそれぞれ3年間連続して実施したものである。分析にあたっては，専ら通常の因子分析（我々の本紀要論文の表現によれば方式Aと方式Cの併用）によった。時間的に一貫した因子と，そうでない因子（一種の分化過程を示すように見えるもので，対人的職業への興味にあらわれる）が分類される等，幾つかの興味ある結果が得られている。これは職業研究所の川上善郎，松本純平両氏と，同研究所紀要に執筆の予定である。

(3) 心理物理的尺度構成

このテーマが現在でも私の mentality に一番合致しているらしい。やはり実験心理学が私の研究上の故郷なのである。今回は昨年予告の difference scaling の実用化に向けて，実験時間（所要試行数）の短縮をはかる工夫を行なった。ORDMET法により部分情報によって解を求めながら，次の試行の呈示刺激を不況情報を補うように求めていく，という computer との interactive なやり方を考えた。実験の実施には大型計算機との対話が必要となるが，これは端末を持たない現状では不可能なので，あらかじめ作った数表を利用した実験を行ない，一応の実用性は確められた。これについては，日本心理学会第42回大会で発表される。現状では大型計算機を利用したとしても，刺激の数が少ない場合（10程度まで）にしか使えないが，計算方法の単純化を含めて，大型計算センターシステムⅡを利用した実験を行なうことを計画中である。

(4) 小論文の評価法

入学者選抜方法研究委員会の研究の一部として開始した。おおよその枠組については，同委員会の報告書に記したが，主観的評価法の信頼性の評価という点に問題を絞り，検討をすすめている。私の従来の研究方向とは全く異質のものであるだけに，いささか戸惑いもあるが，現実の問題領域に近いところで仕事をする面白さを感じていることも事実である。もっとも問題そのものを，種々の理由からかなり一般化せざるを得なかったが，このテーマについてはできる限り早急にまとめを行なう予定である。

研究経過報告

鹿内啓子

1. 個人研究について

帰属作用における個人差の問題に関心をもち，とくに self-esteem が及ぼす影響について研究を少しずつではあるが進めてきた。帰属作用の枠組の中で扱われている領域は近年拡がってきているが，現在のところ，オーソドックスな領域の一つである行動の結果（成功・失敗）についての帰属作用に及ぼす self-esteem の影響を研究してきた。

一昨年度の日本心理学会第40回大会において発表した，中学生を被験者とした集団実験の結果は，今年度の実験社会心理学研究第18巻1号に発表される予定である。また，この実験での不備な点を補い，また年齢の異なった大学生を被験者として昨年度実施した実験の結果は，今年度の日本心理学会第42回大会で発表する予定である。達成動機を帰属作用という認知的な働きの観点から捉えようとする試みがなされてきているが，本年度は，self-esteem の高低による帰属作用の差異が達成動機にどうかかわるかを，現実的な場面で研究することを考えている。また，これまでは自己の行動の結果についての帰属作用を扱ってきたが，今後は他者の行動の結果についての帰属作用に及ぼす self-esteem の影響を検討していきたい。

2. 共同研究について

昨年度から今年度にかけては新しくデータを収集することをやめ，すでに収集してあったが分析されていなかったデータの整理や分析にかかった。これは，1972年

に女子大学に入学した者に対して，9月初旬まで5回にわたって継続的に，パーソナリティおよびソシオメトリックな認知に関して調査を実施したデータである。これは社会心理学の重要なテーマの一つであるにもかかわらず従来あまり扱われてこなかった，対人関係および対人認知の成立の過程を明らかにする目的で行なわれた研究であった。今までに分析し終えた部分については，本紀要にまとめられている。

その他，大橋正夫教授と共同で，藤永保他（編）「児童心理学」（テキストブック心理学4）有斐閣　1977年の第14章対人関係の発達と学級集団　を執筆した。

研究経過報告

杉江修治

昨年度，即ち昭和52年4月から昭和53年3月までの1年間の研究経過を以下に報告する。

(1) 集団問題解決過程で生ずる解決への阻害要因の検討；集団構成，課題の困難度を独立変数として計画した実験を手がかりにこの問題にとりくんできている。昨年度は一昨年度からつづけていた実験を終え，その結果は本年の日本教育心理学会総会に発表をする。以前に発表した研究とあわせて考察してみると，解決を阻害する条件生起の予測に関する興味ある問題が少しずつ明らかになってきたと思われる。しかし未だグループサイズ，課題の質などの角度から吟味すべき問題が残っており，本年度もひきつづき，このテーマにとりくむ予定をしている。

(2) 児童の社会的相互作用技能の訓練に関する研究；昨年度はこの領域については「学級内での社会的相互作用訓練に関する基礎的研究」，「同，Ⅱ」と題してそれぞれ日本教育心理学会第19回総会，日本グループ・ダイナミックス学会第25回大会で，共同研究者の石田裕久と共に発表した。また，昨年度本学部紀要に「社会的相互作用技能訓練の研究に関する基礎的考察」として，この領域にかかわる諸問題を，石田裕久との共著として論じた。一方，実際の資料の収集は残念ながら各種の不都合のためにできず，若干の文献的な検討を行なうにとどまった。今後，実際に学級で教師に相互作用訓練にかかわる働きかけを行なってもらう形での観察研究を実施するという方向で石田と計画をすすめている。

(3) 体育集団に関する研究；昨年度の日本体育学会第28回大会で「チームワーク概念の検討と研究の方向について」，「チームワークに影響する諸要因の分析」の2編を伊藤三洋との共同で発表した。チームワークについての概念的な検討も昨年度さらにすすめたが，これは未だ発表する予定はない。一方，高校のバスケットボールの授業を対象に実験的研究を1つ行なった。これは，チームゲームという，生徒の集団への適応をはかるに非常に適した題材のもとで，実際にチーム内の人間関係はどの様に展開しているのかという問題を，集団発達という観点から検討しようとしたものである。比較的長期にわたる実験であったため，その間に体育授業の方法に関する検討を行なう機会も得られた。この実験結果は本年の日本体育学会に伊藤との共同で2編発表する。

(4) 集団課題解決に関する共同研究；塩田芳久教授を中心としてここ数年行なってきている研究領域である。昨年度は日本心理学会第41回大会で「集団課題解決における解決ストラテジーの研究Ⅲ　収束的課題の場合その2」，を塩田芳久，市川千秋，藤田達雄と，また「収束的課題解決における集団課題解決ストラテジーの研究」を日本教育心理学会第19回総会で市川千秋，藤田達雄との共同で発表した。また，一昨年の学会発表資料をもとにまとめた「集団問題解決における解決ストラテジーの研究Ⅰ」を塩田，市川，藤田との共著で実験社会心理学研究に投稿した。昨年度はまた，集団の解決ストラテジーに関するわれわれの以前の研究をもとに，教育場面に近い事態でこの問題を実験的に検討した。この成果は本年の日本心理学会，日本グループダイナミックス学会に各1編，塩田芳久，塩田勢津子，梶田正巳との共同で発表する。

(5) 学習指導に関する研究会；塩田芳久他と一昨年より続けている学習指導に関する研究会も本年3月迄で第10回をむかえ，さらに本年度もつづいて開催されてきている。昨年度は石田との共同による相互作用訓練の問題を話題提供した。毎回話題提供後に小集団に分かれて行なわれる討論は，教育的諸問題を感じとることができるのに加えて，積極的に自分の意見を表出でき，それを評価にさらすことのできる場として貴重なものであると思っている。

昨年度はまた広島県の豊島地区の教育研究に参加する機会を得た。小・中・高校一貫教育態勢づくりをめざす地域総ぐるみの教育活動がここではじまっている。子どもの学力保障を最大の眼目として，タテマエを捨てて子どものための本当の教育を目ざすここの教師集団に強く心を動かされた。本年も幾度かこの研究集会に参加をする予定がある。授業の実施計画等の段階で幾分かでも貢献をしたいと考えている。